The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	清華簡『湯在啻門』に見える「玉種」について
Author(s)	曹, 方向
Citation	中国研究集刊. 2016, 62, p. 93-106
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/61970
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中国研究集刊 光号（総六十二号）平成二十八年六月 九三―一〇六頁

〔出土文献研究〕

清華簡『湯在啻門』に見える「玉種」について

曹 方向

はじめに

『清華大学蔵戦国竹簡（伍）』に収録されている『湯在啻門』は、全二一簡であり、最終簡（第二一簡）の末端に残欠が見られるものの、文字の欠損はなく、完備した文献である。その内容は、殷の湯王が伊尹に向かって「古之先帝」の優れた言葉や事跡などについて質問し、伊尹が「成人」・「成邦」・「成地」・「成天」などの道を論じながら答えるというものである。

その中の「成人」については、伊尹は「五味の気」を掲げ、その「末気」（五番目の気）を「玉種」と言う。本篇の第六簡～第八簡には、「玉種」が十ヶ月の間に発育して人になるという胎児の成長過程が書かれており、伝世文献の「十月懐胎」の過程と類似するところがある。これについて整理者は、『管子』水地、『淮南子』精神、『文子』九守の三種の伝世文献を参考として列記している（注1）。

これまでの出土文献の中で、「十月懐胎」に関する記述が見られるものは複数あるが、そのうち最も古いものは馬王堆帛書『胎産書』である。近年出版された『長沙馬王堆漢墓簡帛集成』においては、『諸病源候論』婦人妊娠諸病候上、『備急千金要方』婦人方養胎、『医心方』妊娠脈図月禁法の三つの伝世医学資料を参考資料として挙げている（注2）。その三種の資料は、胎児の成長に関する描写が類似しており、本稿では、その中の『諸病源候論』を例として挙げてみたい。また、大形徹氏が「『長沙馬王堆漢墓簡帛集成』修訂国際学術研討会」で発表し

た論文の中に掲げている一覧表には、古籍・字書や前述の資料以外に、『諸病源候論』妊娠転女為男候、『備急千金要方』逐月養胎方（二種）、『医心方』産経（二種）(注3)、『説文解字』、『広雅』などの資料も含まれている。これらの資料の整理は、「玉種」の十ヶ月間の生成・成長過程を検討する上で、きわめて大きな助けとなった(注4)。

馬王堆帛書や清華簡はすべて出土文献である。清華簡は海外に流出した文物であるが、その出土地は、馬王堆漢墓がある長沙と同様に、もともと楚の領地に属していた場所であると考えられる。このことから、以下、馬王堆帛書『胎産書』を主な比較材料として、清華簡『湯在啻門』に見える「玉種」の成長過程について検討していきたい。

一、第一、第二段階について

まず、『湯在啻門』中の「玉種」の成長過程が述べられている部分の原文を掲げる。以下の原文は、基本的に整理者の釈文に基づくが、一部、解釈を改めた箇所がある。

一月始𩠐（孕？）、二月乃裹、三月乃形、四月乃固、五月或收（呴？）、六月生肉、七月乃肌、八月乃正、九月顯章、十月乃成、民乃時生。

一ヶ月目の懐妊から十ヶ月目の嬰児出生まで、各種文献の主な差異は八ヶ月目に集中している。たとえば、『淮南子』と『文子』は、「胎」となる時間に一ヶ月の差がある。古代の医療条件の下では、おそらく胎児が発育する過程を正確に把握するのは難しい。また、胎児の成長は何ヶ月続いて、身体各部はいつから発育が始まり、いつ完全になるのかということについては、精確に描写することは不可能であろう。

しかし、大まかに言うと、各種文献の記載はおおむね次の四段階に分けることができる。

第一段階：懐胎（一ヶ月目）
第二段階：胎児が初めて人の形となる（二ヶ月目、三ヶ月目）
第三段階：胎児の身体が徐々に発育していく（四ヶ月目以降）
第四段階：生まれる（十ヶ月目）

本篇では、内蔵・四肢・血管・毛髪・皮膚などの成長過程について具体的に述べられているが、各種文献には

完全に一致する見解はない。そこで、以下、各種文献と比較しながら、本篇の内容を確認し、その特徴を明らかにしていきたい。

まず、第一、第二段階について検討してみよう。

一ヶ月目は、無から有になる最初の段階である。簡文の「𠬝」字は、整理者は、「易」声に従い、「揚」と読み、「玉種播揚」という意味であるとする。これは「種を蒔く」という角度から推測されたものであると考えられるが、この解釈は理解しがたい。一般的に、胎児の成長の一ヶ月目は受胎の段階である。それゆえ、簡文のこの字は直接「孕」と読めるかどうかを考える必要がある(注5)。簡文のこの字は「勹」に従い「易」に従う字であり、整理者の隷定には従うべきである。「孕」の異体字「𡢁」・「𦞦」は、伝抄古文や『玉篇』・『集韻』などの字書・韻書、『周礼』秋官・薙氏、『管子』五行、『太玄』馴などの典籍に見える。したがって、整理者が「𠬝」の字を「勹」や「易」から隷定したことは正しく、従うべきであると考えられる。たとえば『太玄』馴では、「𦞦其膏」とあり、「𦞦」は孕と読むことができる(注6)。『周易』漸卦「婦孕」の「孕」は、馬王堆帛書『周易』漸卦などでは「繩」に作り、学者たちは今本によって「孕」と釈読している(注7)。古音を調べると、「𠬝」字が従うところの「易」は以母陽部に属し、「孕」・「𦞦」・「𦞦」・「繩」などの以母蒸部の字（便宜上、下文では「𦞦（孕）」と書く）と比べると、声母はみな同じである。また、蒸部と陽部とは通仮の例もある。たとえば、『周礼』秋官・薙氏の「萌之」の鄭玄注には「故書或作甍」とあり、「萌」は陽部に属し、「甍」は蒸部に属す。『荘子』天運の「使民心競」の「競」は、『太平御覧』では「競」を引用して「兢」に作る。「競」は陽部に属し、「兢」は蒸部に属す。『呂氏春秋』挙難に見える人名「樂騰」の「騰」は、『新序』では「商」に作る。「商」は陽部に属し、「騰」は蒸部に属す。ゆえに「𠬝」は「易」を音符としており、「𦞦（孕）」と読むことができる。

さらに注目すべきは、「勹」の字は古文字資料の中に用例があり、しかも「孕」と通仮する条件も備えているということである。李家浩氏の分析によると、古文字の「勹」と「宛」とは音義が近いとされる(注8)。前掲の『太玄』の「𦞦」の字は、ある版本では「𡢁」に作り、音は「鴛」であり、銀雀山漢簡『孫子兵法』の「畹」に作る「𡢁」の字に当たる(注9)。「宛」と「畹」・「𡢁」は、同じ影母元部の字に属す。これにより、「勹」は直接「𡢁（孕）」・「繩（孕）」・「𦞦（孕）」と釈読できることがわかる(注10)。

文意については、前掲の『太玄』は「𦞦其膏」と言

う。『淮南子』のように一ヶ月目を「膏」と見なすものであろうと、『胎産書』（第三行）などのように二ヶ月目を「膏」と見なすものであろうと、必ず先に「蠅（孕）」し、その後に「膏」となる。後述のように、簡文の二ヶ月目の「裹」と「膏」とは互いに対応している段階であり、そのため一ヶ月目の「芻」は、語句の上でも『太玄』の「蠅（孕）」と対応することがわかる。つまり、「芻」は当然「婉」・「蠅」・「膃」などの字に釈読できるのである。これらの字は使われることが少ないため、直接「孕」と読むべきであると考えられる。

一ヶ月目は受精卵が発育して胚胎を形成するが、古代の技術の条件下では、はっきりと観察することは困難である。そのため、この一段階の胚胎を正面から描写することは難しい。『胎産書』第二行は一ヶ月目の胎の「流形」を述べ、『諸病源候論』などでは「始形」に作る。「流形」は、鋳造する金属の溶液を用いて受胎のことをたとえているのかもしれない(注11)。その他、『医心方』が収録する一種の『産経』は一ヶ月目を「胚」としている。「胚」も生物の一般的な成長規律によって定められた名である。『爾雅』釈詁の郭璞注に「胚胎未成、亦物之始也。」とあり、邢昺疏に「尚未成形而為形之始、故曰「胚胎未成、亦物之始」、物則形也。」とあり、実際に指すところも受胎である。

「二月乃裹」については、整理者は『淮南子』の用例を根拠として、「裹」は輪郭が初めて現れることであると見なしている。『胎産書』や『諸病源候論』などの医書では二ヶ月目を「膏」と言い、前掲の『太玄』も「蠅其膏」と言うことから、「膏」は凝固した液体であり(注12)、輪郭があるのは当然である。しかし、「裹」と「膏」の語義の関係は密接と言うには十分ではないようである。

華東師範大学中文系出土文献研究工作室の論文では、「裹」は「妊娠時に胎児を包んでいる器官である。これは古くは「胞」・「胞衣」などと言い、実際には今の西洋医学で言うところの羊膜・胎盤などを含んでいる。」と指摘しており(注13)、またある人は「裹」は「包裹、纏繞」（包む、まきつく）の意味であると見なしている(注14)。具体的に指しているのは、おそらく「胞衣」（胎盤）であろう。これらの二つの解釈も道理があると考えられる。

二ヶ月目の胚胎は嚢状（いわゆる「嚢胚」）になり、胎児はまだ人の形をしておらず、嚢の中に収まっているような状態である。『胎産書』の第二行～第三行には、「二月始膏、……是謂始藏」（二ヶ月目に胎児は初めて膏となり、…これを始蔵と言う）とあり、『諸病源候論』妊娠転女為男候にも「二月始藏精氣成於胞裹」（二ヶ月

目に初めて精気を胞裹に蔵する）とある(注15)。このことから、簡文の「裹」は、「包んで蔵する」という意味であると考えられる。同時に、この段階の胚胎の全体は凝結物のようであり、これを「膏」と称するのは実情とも合致する。これにより、たとえ言葉の使い方に差違があっても、簡文と帛書や『諸病源候論』などの医書の記述とは矛盾がないと考えられる。

「三月乃形」について、整理者は、胎児が人の形になることを指すと述べる。華東師範大学中文系出土文献研究工作室の論文は、胎児が初めて形状をなすことを指すと見なしている(注16)。『胎産書』・『諸病源候論』・『説文解字』などでもすべて三ヶ月目に「胎」となると言い、これは胎児が初めて人の形になることを指し(注17)、簡文と合致する。

ここまでは、簡文・帛書と伝世文献はおおよそすべて受胎から胎児が初めて人の形になるまでを記載しており、この後はさらに胎児の身体の発育状況を描写する。三ヶ月目以前の胚胎の描写については、いずれも間接的であり、また漠然としたものである。

二、第三、四段階について

次に、第三、第四段階について検討してみたい。

「四月乃固」について、整理者は、胎児が安定していることを指すと述べる。しかし、その意味は曖昧であり、また「三月乃形」とあわせて考えた場合、重複しているように思われる。『胎産書』は四ヶ月目に「成血」（血ができること）を述べ、『諸病源候論』などの医書にも四ヶ月目に「血脈」ができると書かれている。現代医学では、二ヶ月目に胎児に血管が現われるとされ(注18)、『胎産書』の血脈の形成時間は遅すぎるようである。しかし、『胎産書』およびその他の医書は四ヶ月目に「血」・「血脈」ができると言い、これは胎児の血管の発育であると考えられるため、誤った結論と見なすこともできない。ただし、簡文の「固」の字は、血脈と関係するとは考えがたい(注19)。

前述の通り、胎児は三ヶ月目に初めて人の形となるが、性別はまだ確定していない状態である。古今を問わず、胎児の性別については重大な倫理的問題が存在し(注20)、ほとんどの文献で三ヶ月目に胎児の性別の問題や男胎・女胎の養生について言及している。たとえば

『胎産書』の第四行～第六行には、三ヶ月目の胎児について「當是之時、未有定儀、見物而化。……欲産男、……欲産女……是謂内象成子。」とあり、胎児の身体や、性別がまだ定まっていないことや、男子の胎児と女子の胎児を養う方法について記載している。類似の記述として、たとえば『諸病源候論』妊娠転女為男候は「至於三月……未有定儀、見物而化。是時男女未分……」と述べ、また『備急千金要方』逐月養胎方には「妊娠三月……當此之時、未有定儀、見物而化。欲生男者……欲生女者……」とある(注21)。『医心方』に引用されている『産経』も、三ヶ月目の胎児は性別がまだ確定していないと述べている。また、『胎産書』第二一行には男子の胎児を養成するための一種の処方箋が紹介されており、「未満三月」(まだ三ヶ月に満たない状態)が時間の限度であることを特に強調している。Donald. J. Harper氏は、この部分と前述の三ヶ月の胎児の「未有定儀」という内容とは直接関係し、また『胎産書』第二四行に残存する「三月」も、男子の胎児の養成に効き目がある処方箋に関する内容であると指摘している(注22)。つまり、当時において、三ヶ月目は胎児の性別が定まる前の重要な期間なのである。このことから、「四月乃固」は、胎児の性別が確定することを指している可能性がきわめて高い。

「五月或收」について、整理者は、「收」を「褒」と読み、『詩経』の鄭玄箋「褒、枝葉長也。」(褒は、木の枝や葉が伸び広がることである)を引用している。その意味を推測すると、胎児の四肢の成長は、樹木に枝葉が生えるようであるということを述べているようである。『胎産書』や『諸病源候論』などの伝世医書が五ヶ月目に「氣」ができると言っていることによると、「收」は胎児が自分で空気を吸うことができる状態を指していると考えられる。たとえば、『胎産書』には「五月…乃使成氣…以養氣。」とあり、『諸病源候論』には「妊娠五月、……以成其氣。」とあり、『医心方』の『産経』の一つには「懐身五月、……以盛血氣。」とある。古代の人々は常に「血」と「氣」とを並列にしており(注23)、『胎産書』が前の月に「血」と書き、この月に「氣」と書くのは、理にかなっている。『胎産書』に基づくと、簡文の「收」の字は「丩」声に従い、「呴」と読むことができるようである(注24)。「收」・「呴」はすべて「丩」を基本の音符とする。金文の馬駒の「駒」は、一般的に「句」声に従うが、「丩」声に従うものもある(注25)。典籍の「鉤膺」の「鉤」は、**𠬝**戒鼎の銘文の中では「翼」に従い、「丩」声に従う(注26)。また、『漢書』王褒伝に「呴嘘呼吸」とあり、その顔師古注に「呴・嘘、皆開口出氣也。」と

ある(注27)。古代の人々は胎動などの現象を根拠として、胎児がすでに呼吸できる状態にあると推測していた可能性がある。あるいは、簡文の「五月或收」の意味は、胎児が呼吸を開始したことを指すのかもしれない。「或」は古代漢語の中でしばしば疑問や推測の語気を示し、ここで用いられているのも偶然ではないのかもしれない。

「六月生肉」については、整理者は『管子』水地の「五臟已具、而後生肉。」(五臟がすでに備わり、その後に肉を生じる)を引用している。「七月生肌」については、整理者は「生長肌膚」(筋肉と皮膚が成長すること)を指すと述べる。「八月乃正」については、整理者は「定型」(形が定まること)を指すと見なしている。これらの注釈は基本的にすべて理にかなっているものである。『胎産書』は六ヶ月目に「筋」ができ、七ヶ月目に「骨」ができ、八ヶ月目に「膚革」(皮膚)ができるとし、『諸病源候論』などの伝世医書とほぼ同じである。たとえ具体的な月の配当と簡文の順序とが大いに異なっているとしても、実際に記録されている内容は皮膚・筋肉・骨格の成長にほかならない。「骨」と「正」との関係については、『素問』生気通天論に「骨正筋柔」(骨が端正であり筋が柔らかい)とある。簡文の「正」は、まさに『素問』が言う「骨正」であり、胎児の骨格の発育が整うことであろう。こうして、胎児の身体はさらに完全なものとなっていくのである。

筋肉や骨格の発育とともに、胎児は母体の中で活発に動くようになり、七ヶ月目以降から九ヶ月目までは胎動が激しくなる。帛書や伝世医書が七ヶ月目に「骨」ができると言うのは、まさに発育が完成した骨格を指す。簡文の「八月乃正」の「正」は、帛書などの「骨」と対応している。『素問』生気通天論には「謹和五味、骨正筋柔、氣血以流、腠理以密。」とある。発育が完成した骨格は、ようやく人体の支柱の役割を真に果たせるようになる。簡文が述べる「正」は、すでに骨格の発育が完成していること、つまり『素問』が述べる「骨正」を指している可能性があり、また整理者が言うように、胎児の身体の構造が「定型」となったことを指している可能性もある。この両者は、結局のところ同じ意味であろう。

「九月顯章」について、整理者は、「意思與成功相近」(意味は成功と近い)と見なしている。その意味を理解すると、胎児が完全に成長する、すなわち間もなく出産であることを指していると考えるのが合理的である。間もなく生まれる嬰児は当然、身体の各部位が完全に発育している状態である。ある学者は、「顯章」は皮膚の筋目が見えること、あるいは男女の性別が判明することで

はないかと指摘している(注28)。この解釈は具体的ではあるが、必ずしも信用できない。『胎産書』は、九ヶ月目に「始成毫毛」、すなわち胎児のうぶ毛が初めてできるとし、『諸病源候論』や『備急千金要方』なども九ヶ月目に「皮毛」ができる、すなわち胎児の皮膚と毛髪ができると述べており、これは出生時のような光沢のある毛髪が最終的に完成したと理解すべきである。簡文の「顯章」は当然、胎児の身体の発育が完成したことを指しており、具体的には、毛髪が成長したことを指していると理解できるようである。毛髪は人体の表面の最も細かいものであり、胎児の毛髪の発育が完成することは、身体の発育が完成したことの表現でもある。この後、十ヶ月目に嬰児が生まれる。

三、竹簡・帛書と伝世文献との差異について

以下、再び他の文献の「十月懐胎」についての異なる描写について考えてみたい。

本稿の冒頭で言及したように、多くの学者が伝世文献や出土文献の中の「十月懐胎」の記述を列記しているが、『管子』・『淮南子』・『文子』などの非医学類の文献は、簡文や『胎産書』などと比べて大きな差違がある。時代が比較的遅い医学文献は、また別に先後の順序がある。非医学類文献と時代が比較的遅い医学文献とは、総括すると以下の二つの点が挙げられる。

一つは、非医学類の文献は、多くが隣りあう二つの月に、近い意味の言葉を使っている点である(【表1】・【表2】参照)。たとえば、『淮南子』・『文子』・『広雅』の一、二ヶ月目はそれぞれ「膏」と「脂」であり、『淮南子』・『文子』・『広雅』の八、九ヶ月目は、それぞれ「動」と「躁」である。古代漢語において、「膏、脂也(膏は、脂なり)」と「躁、動也(躁は、動なり)」という解釈がしばしば見られるように、これらは語義が非常に近いため(注29)、二つの月はそれぞれどんな言葉で区別すべきか判断が難しい。たとえば、『文子』は八ヶ月目は「動」と、九ヶ月目は「躁」と書き、旧注では「八月而動」は「降其神靈」のことであると述べているが、これは実際には胎動を指すと考えられる。しかし、結局のところ、胎動が始まるのが八ヶ月目なのか、それとも九ヶ月目なのかは、区別しがたい。『産経一』および『産経一』の注釈に引用されている『太素』は、『淮南子』や『文子』などと同様であり、もともと非医学類の文献に基づいて書かれたものなのかもしれない。

もう一つは、胎児の発育の順序を述べる際、すべてが

【表１】

	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十
『淮南子』	膏	胅	胎	肌	筋	骨	成	動	躁	生
『文子』	膏	脈	胚	胎	筋	骨	成	動	躁	生
『広雅』	膏	脂	胎	胞	筋	骨	成	動	躁	生

【表２】

	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十
清華簡『湯在啻門』	芻	裹	形	固	收	肉	肌	正	顯章	生
馬王堆帛書『胎産書』	流形	膏	脂	血	氣	筋	骨	膚革	毫毛	生
『産経二』	始形	膏	胎	血脈	血氣	筋骨	骨髓	膚革	皮毛	生
『産経一』	胚、胞	胎	血脈	骨	動	成	毛髮	瞳子	胃	生
『太素』	膏	脈	胞	胎	筋	骨	成	動	躁	生

合理的であるとは限らないという点である。同一の書の中でも記述が統一されていないことがあり（【表１】・【表２】参照）、たとえば、『産経一』と『産経二』の順序には大きな差違がある。具体的な器官の発育の順序に差があるだけでなく、「胎」となる時期についても、一ヶ月の差違がある。また、胎児の身体の発育の順序も合理的ではないものがある。たとえば、『淮南子』に記されている成長過程は、七ヶ月目にすでに「成」り、八、九ヶ月目に続けて「動」と「躁」と書かれ、十ヶ月目に「生」まれた後、また「形體以成、五臟乃形」と述べる。『文子』は、一ヶ月目にすでに「膏」ができ、二ヶ月目にすでに血脈ができ、三ヶ月目には前に戻って「胚」ができ、四ヶ月目には「胎」ができると言う。前掲の『医心方』の『産経一』については、五ヶ月目に胎児が「動」き、六ヶ月目に「形成」した後に、毛髮・内臟（胃）・目（瞳子）ができると書かれている。このように、内容に混乱が見られる文献もある。

おわりに

以上、本稿では、清華簡『湯在啻門』の「玉種」に関する考察を行った。簡文に記されている十ヶ月間の胎児の成長過程は、各種文献の描写と比べると詳述の程度が異なり、そのうち簡文の順序と最も近いものは馬王堆帛書『胎産書』である。【表２】を見ると、『湯在啻門』の「玉種」に関する簡文は、『胎産書』および『医心方』に収録されている『産経二』とよく似ている。これを「甲組」の文献と見なした場合、これと相対する『淮南子』、『文子』、『広雅』、『医心方』に収録されている『産経一』、『太素』などの文献は互いに類似性が強く、「乙組」と見

なすことができる。これら二組の文献は、明らかに来源が異なるものである。たとえば、学者は通常、『文子』のこの段の文章は『淮南子』に基づくと認識している。実際には、『広雅』を含む訓詁学の材料も、同じく『淮南子』を来源とするものである可能性がある。しかし、『淮南子』は乙組の真の祖本であるのかどうか、現時点では判断しがたい。なぜなら『淮南子』の編著者もその他の先秦時代の文献を引用した可能性があるからである。甲組の祖本の年代については、清華簡が戦国中晩期の文献であることにより、その祖本の年代も戦国中期より遅いとは考えられない。

現代医学と結びつけて分析すると、簡文と『胎産書』は、比較的理にかなっている。これら二つの文献は、戦国中晩期から漢代初期までの二百年前後の間に展開し、古代の人々、とりわけ戦国時代の楚人と秦漢時代の楚地の人は、胎児の十ヶ月間に成長・発育について、ある程度認識していたと考えられる。

しかしながら、『淮南子』は同じく漢代初期に楚国の故地で編纂されたものである。当時編纂に参加した人々は、『湯在啻門』の類の戦国文献を見ていなかった可能性があるが、『胎産書』のような医学文献と全く接触していなかったとは考えがたい。秦代の焚書を経て、漢代初期は書籍の欠乏が深刻であった。『湯在啻門』と「詩書百家語」の類は非常に近く、焼き払われた可能性が高い。しかし、史書には、医書は焼き払われたものの列には並んでいなかったという明確な記載がある。では、なぜ『淮南子』などの内容と馬王堆帛書『胎産書』には大きな差異が存在するのか。これについては、今後さらに検討を進めていきたい。

注

(1) 清華大学出土文献研究与保護中心編『清華大学蔵戦国竹簡(伍)』、一四八頁。本篇の概要については、「清華簡(五)所収文献解題」(『中国研究集刊』第六一号、二〇一五年一二月)、八一～八五頁を参照。

(2) 湖南省博物館・復旦大学出土文献与古文字研究中心『長沙馬王堆漢墓簡帛集成(陸)』(中華書局、二〇一四年六月)、一〇一～一〇二頁。本稿では、馬王堆帛書『胎産書』を引用する際、学界の慣習に従って、帛書の行列番号を注記することとする。ここで使用している行列番号はすべて『長沙馬王堆漢墓簡帛集成(陸)』のものである。

(3) 『医心方』巻二〇の「妊婦脈圖月禁法第一」・「妊婦修身法第二」はそれぞれ『産経』に収録されており、内容は大いに異

なる。前者は比較的詳細であり、「黄帝」が「岐伯」に問う部分を冒頭とし、その後、妊婦と胎児の十ヶ月の変化について述べる。以下、岐伯が黄帝に答える際に、胎児の十ヶ月間の成長・発育を簡潔に述べる部分を『産経一』とし、その後の妊婦と胎児の十ヶ月の変化を詳細に述べた部分を『産経二』とする。後者は三つの短篇からなり、月の順に論述するものでもない。

（4）大形徹「《胎産書》之「始」」（湖南省博物館・復旦大学出土文献与古文字研究中心・中華書局主催「『長沙馬王堆漢墓簡帛集成』修訂国際学術研討会」論文集、二〇一五年六月二七日、於上海・復旦大学）、および大形徹「『胎産書』の「始」」（『漢字学研究』第三号、二〇一五年八月、一一八～一二一頁）参照。

（5）王寧「讀《湯在啻門》散劄」、復旦大学出土文献与古文字研究中心網、二〇一五年五月六日。王氏は最終的な結論として「揚」と読んでいるが、論述の過程の中では「孕」と読む可能性に言及している。

（6）伝抄古文字の字形については、徐在国『伝抄古文字編』（線装書局、二〇〇六年一〇月、一四七四頁）参照。その他の資料については、高亨編著・董治安整理『古字通仮会典』（斉魯書社、一九八九年七月、三二頁）、馮其庸・鄧安生編著『通仮字彙釈』（北京大学出版社、二〇〇六年二月、八四五頁）などを参照。

（7）湖南省博物館・復旦大学出土文献与古文字研究中心『長沙馬王堆漢墓簡帛集成（叁）』（中華書局、二〇一四年六月、三六頁）、白於藍『戦国秦漢簡帛古書通仮字彙纂』（福建人民出版社、二〇一二年五月、六〇七頁）、王輝『古文字通仮字典』（中華書局、二〇〇八年二月、三四九頁）参照。

（8）李家浩「甲骨文北方神名「勹」与戦国文字従「勹」之字——談古文字「勹」有読如「宛」的音」、『文史』二〇一二年第三期。「勹」と「宛」の音義の関係については、六二～六九頁に集中的に論じられている。

（9）（宋）司馬光『太玄集註』、一六五頁。簡帛文献中の関連する通仮の例証については、白於藍『戦国秦漢簡帛古書通仮字彙纂』、四二三～四二四頁参照。

（10）本稿の執筆過程中、筆者の師である李天虹氏より、これは一つの双声符の字ではないかとの指摘があり、この解釈は正しい可能性がある。陽・元の二つの部は主母音が同じで、関係が密接である。たとえば、『説文解字』では「丱」は「礦」の古文であるとし、「丱」は元部に属し、「礦」は陽部に属す。新蔡葛陵楚簡の甲三・第一五簡の「滌栗」は、李天虹氏は「戰慄」あるいは「顫慄」と読み、「戰」・「顫」はいずれも元部に属し、「滌」は「象」声に従い、陽部に属す。「勹」が「宛」の発音を取る時も元部の字に属し、陽部の「昜」声であるとの注が加えられている。李天虹「新蔡楚簡補釈四則」（簡帛研

究網、二〇〇三年一二月一七日）、陳偉主編『楚地出土戦国簡冊［十四種］』（経済科学出版社、二〇一〇年第二刷、四〇六頁、注釈四三六～四三七頁）参照。

（11）Donald.J.Harper「Early Chinese medical literature：The Mawangdui Medical Manuscripts」（『Columbia University Press』、一九九七年）三七八頁注釈六、大西克也「試説「流形」」（『出土文献』第一輯、中西書局、二〇一〇年八月）一八一～一八四頁、周祖亮・方懿林『簡帛医薬文献校釈』（学苑出版社、二〇一四年五月）二七六頁参照。

（12）その例としては、『左伝』成公十年の孔穎達疏に「雖凝者曰脂、釋者曰膏。其實凝者亦曰膏。」、『大戴礼記』の盧辯注に「凝者為膏。」とある。

（13）華東師範大学中文系出土文献研究工作室「読《清華大学蔵戦国竹簡（伍）》書後（三）」、簡帛網、二〇一五年四月一七日。

（14）簡帛網・簡帛論壇「清華簡《湯在啻門》初読」第一四帖、二〇一五年四月二一日。

（15）『雲笈七籤』が引用する『文子』には「二月而胞」とあり、別本とは異なる。しかし、前人注の『文子』は、多くは『雲笈七籤』の引用文によって改められたものであると考えられる。王利器『文子疏義』（中華書局、二〇〇〇年九月、一一八頁）参照。

（16）華東師範大学中文系出土文献研究工作室「読《清華大学蔵戦国竹簡（伍）》書後（三）」、簡帛網、二〇一五年四月一七日。

（17）『医心方』（丹波康頼撰、高文柱校注『医心方』、華夏出版社、二〇〇一年一月）巻二〇の「妊婦脈圖月禁法」に附されている胎児発育の図示には、一ヶ月目・二ヶ月目はただ黒点で表示されているのみで、三ヶ月目に胎児の形状を描き出している。その根拠は、まさしく『医心方』が収録する『産経』の「三月始胎」である。

（18）『文子』は二ヶ月目を「脈」と言い、これと一致するようである。しかし、これは偶然の一致である可能性もある。『文子』の「十月懐胎」については、簡文・帛書および伝世医書とすべて異なる。もし『文子』のもともと三ヶ月目の「胚」を繰り上げて一ヶ月目にし、もともと一ヶ月目の「膏」を後ろに移して二ヶ月目にし、もともと二ヶ月目の「脈」を後ろに移して四ヶ月目にし、もともと四ヶ月目の「胎」を繰り上げて三ヶ月目にするならば、帛書・医書などとおおむね対応すると考えられる。そうでなければ、『文子』が記す順序は、単独の例であるだけでなく、あまり合理的でもない。

（19）整理者が「固」と読む字は、簡文は「古」声に従い、学者は改めて「骨」と読んでいるが、たとえ通仮が成立可能であっても、事実に合わない。後述の胎児の筋肉と骨格の発育状況を参照。

（20）男女の性別の問題に関する古文字資料は、甲骨文の中にす

でに少なからずある。胎児の性別を予測することは、遙か昔からの伝統であるとも言える。

(21) 類似の表現は、『医心方』が収録する一種の『産経』に見え、「懐身三月……當此之時、未有定儀、見物而化。」とある。しかし、この『産経』が直接述べていることは胎児の性別ではなく、疾病の問題であり、前述の三種とは異なる。

(22) Donald.J.Harper「Early Chinese medical literature : The Mawangdui Medical Manuscripts」、『Columbia University Press』、一九九七年、三七九頁注五。

(23) たとえば、『管子』禁蔵に「食飲足以和血氣。」と、『礼記』三年問に「凡生天地之間者、有血氣之屬、必有知。」とある。

(24) 本稿の執筆過程中、李天虹氏は、この「收」は『産経』などが言及する「成」と対応関係があるかもしれないと指摘した。本稿では、『産経』が述べるところと簡文とは対照できる箇所が比較的少ないと見なしていることから、しばらくはこの説を取らず、以後、再検討したい。

(25) 字形については、容庚編著、張振林・馬国権摹補『金文編』(中華書局、一九八五年七月、六七七頁)参照。

(26) 呉振武「**焚**戒鼎補釈」、『史学集刊』一九八八年第一期、四～六頁。

(27) これ以外に、『荘子』大宗師は魚を「相呴以濕」と書く。五ヶ月目に胎児はなお母体におり、羊水の中で呼吸しており、これはまさに魚が水中で呼吸するように普通のことである。胎児が母体で呼吸することに「呴」の字を用いているのは、これとは無関係ではないのかもしれない。

(28) 関連する意見はインターネット上の論壇や論文に見える。王寧「読『湯在啻門』散札」(復旦大学出土文献与古文字研究中心網、二〇一五年五月六日)参照。

(29) これらの語は語義が近く、古籍では互いに解釈できる。たとえば、『楚辞』天問の洪興祖注に「膏、脂也。」と、『淮南子』主術の「人主静漠而不躁」の高誘注に「躁、動也。」とある。

【参考文献】

・白於藍『戦国秦漢簡牘帛書通仮字彙纂』、福建人民出版社、二〇一二年五月。

・大形徹『馬王堆出土文献訳注叢書　胎産書・雑禁方・天下至道談・合陰陽方・十問』、東方書店、二〇一五年三月。

・大形徹「『胎産書』の「始」」、『漢字学研究』第三号、二〇一五年三月。

・大西克也「試説「流形」」、『出土文献』第一輯、中西書局、二〇一〇年八月。

・Donald.J.Harper「Early Chinese medical literature : The Mawangdui Medical Manuscripts」、『Columbia University Press』、一九九七年。

・馮其庸・鄧安生編著『通仮字彙釈』、北京大学出版社、二〇〇六年二月。
・高亨纂著・董治安整理『古字通仮会典』、斉魯書社、一九八九年七月。
・何寧『淮南子集釈』、中華書局、一九九八年一〇月。
・華東師範大学中文系出土文献研究工作室「読《清華大学蔵戦国竹簡（伍）》書後（三）」、簡帛網、二〇一五年四月一七日。
・湖南省博物館・復旦大学出土文献与古文字研究中心『長沙馬王堆漢墓簡帛集成』、中華書局、二〇一四年六月。
・李家浩「甲骨文北方神名「勹」与戦国文字従「勹」之字――談古文字「勹」有読如「宛」的音」、『文史』二〇一二年第三期。
・馬継興『馬王堆古医書考釈』、湖南省科学技術出版社、一九九二年一一月。
・清華大学出土文献研究与保護中心編『清華大学蔵戦国竹簡（伍）』、中西書局、二〇一五年四月。
・司馬光『太玄集註』、中華書局、一九九八年九月。
・中国出土文献研究会「清華簡（五）所収文献解題」、『中国研究集刊』第六一号、二〇一五年一二月。
・王寧「読『湯在啻門』散札」、復旦大学出土文献与古文字研究中心網、二〇一五年五月六日。
・王輝『古文字通仮字典』、中華書局、二〇〇八年二月。
・王利器『文子疏義』、中華書局、二〇〇〇年九月。
・呉振武「**焚**戒鼎補釈」、『史学集刊』一九八八年第一期。
・徐在國『伝抄古文字編』、線装書局、二〇〇二年六月。
・周祖亮・方懿林『簡帛医薬文献校釈』、学苑出版社、二〇一四年五月。

【附記】

本稿は、二〇一五年九月二三日および二〇一五年一二月二〇日に開催された中国出土文献研究会の研究会合において発表した論文に修訂を加え、定稿としたものである。また、本稿の執筆過程中、李天虹氏（武漢大学簡帛研究中心教授）よりご意見・ご教示を賜った。日本語翻訳の際には、草野友子氏（京都産業大学特約講師）、佐藤由隆氏（大阪大学大学院生）の助力を得た。関係者各位に対し、この場をお借りして感謝申し上げたい。

本研究は、日本学術振興会科学研究費補助金・特別研究員奨励費（JSPS KAKENHI Grant Number 26・04302）および中国教育部青年基金項目（15YJC770003）の助成を受けたものである。